

描かれた関東大震災

—— 絵巻・版画・素描 ——

北 原 糸 子

KITAHARA Itoko

はじめに

関東大震災の惨状は多くの人々にさまざまな形で衝撃を与えた。画家は被災地を巡り、その衝撃を絵画として結実させた。ここに取り上げる作品群はそのわずかな例に過ぎない。これまでもカメラによって捉えられた被害の惨状は多く紹介されているが、画家によって描かれたもののうち公の目に触れる機会が得られたものは限られている。⁽¹⁾ここでは萱原白洞による絵巻3巻、震災後直ぐに頒布された版画集、池田遙邨による素描などを取り上げ、関東大震災を描く画家たちがこの震災をどのように受け止めようとしたのか、それらの作品群は当時の社会にどのように受け止められたのかなどを考えることにしたい。予めお断りしておきたいことは、筆者は美術史の専門家ではないので、美術史的観点からこれらの絵画を扱うものではなく、あくまでも描かれた関東大震災で伝えられる震災像とはどのようなものであったのかを問うことを主眼としている点である。あるいは、美術品としての扱い方に大きな誤りを犯していることもあり得る。ご教示いただくことを願うばかりである。

1-1. 萱原白洞作「東都大震災過眼録」全3巻

まず、この絵巻を取り上げるに至った理由を簡単に説明しておきたい。この画家の作品にわたしたち（非文字資料研究センター関東大震災研究グループの田中傑、高野宏康、北原糸子）が出会ったのは、東京都慰霊堂（震災記念堂）の資料収蔵庫に当てられている塔の3階であった。2008年ここに収蔵されている資料類の調査について東京都建設局公園課の許可を得て、紙類の資料に限定して調査を開始した（収蔵庫には焼けた食器類、真鍮、鉄製品などの生活用具類などの多数の震災の被災物も保管されている）。そのなかに黄丘作「東都大震災過眼録」第3巻なる絵巻があった。震災の情景を多くの被災者群像で描くこの絵巻にわたしたちは感嘆した。しかし、黄丘なる人物が誰なのか、いつこの絵巻が震災記念堂に保管されたのか、あるいは寄贈されたのかについては皆目情報はなかった。そこで、佐倉の国立歴史民俗博物館で関東大震災の常設展示を手掛けた旧知の新井勝紘氏に問い合わせた結果、国立歴史民俗博物館には同一人物の手になると思われる画帖「関東大震災」が所蔵されていることが判明した。これは2000年に展示参考資料として購入されたものである。また、新井勝紘氏からの情報によって、白洞作「東都大震災過眼録」なる絵巻が大阪人権博物館で展示され、学芸員仲間恵子氏による論文も発表されていることを知った。⁽²⁾仲間氏の最初の白洞紹介論文は、絵巻の末尾に記された「東都大震災過眼録 大正十三年三月中旬 白洞生写 於上総土気 郷天真草舎」の上総



図1 「東都大震災過眼録」 第1巻 (40.4×1410 cm), 地震発生直後, 人々が家から逃げ出す様子



図2 「東都大震災過眼録」 第2巻 (40.4×1510 cm), 永代橋は東西両詰から人々が押し寄せ, やがて火が付き, 焼け落ちて, 多くの人々も川に落下した.



図3 「東都大震災過眼録」 第3巻 (40.4×1230 cm), 火災も収まった9月3日以降罹災して家を失った人々はそれぞれ逃げる途中で別れた親・子・兄弟を木片や紙片に名前を書いて探し求めた.

とけ
土気という地名だけを便りに白洞なる人物を探求し, 漸くそのご家族にお会いするまでのスリルに満ちた苦勞が語られている. この論文に導かれて, 作者萱原黄丘とは白洞の後の雅号であること, 本名萱原竹尾 (1896~1951), 千江夫人が千葉にご存命であることも知り, 萱原家の方々 (白洞氏長女の萱原礼子氏, 礼子氏の長女健子氏) と直接接することができた. 萱原家のご厚意で, 萱原白洞作「東都大震災過眼録」全3巻を直接眼にすることができたのである. なお, 仲間氏の論文では「東都大震災過眼録」を「関東大震災絵巻」と読み替えて紹介されている.

以上の過程で, 現在, 「東都大震災過眼録」に関連する絵巻は以下の6巻が確認されている.

- (1) 萱原家蔵「東都大震災過眼録」第1巻 (「東都大震災過眼録 卷一白洞写之」)
- 「東都大震災過眼録」第2巻 (「東都大震災過眼録 卷二白洞写之」)

- 「東都大震災過眼録」第3巻（「大正十二年九月一日 東都大震災過眼録 卷三 同年十二月写之 白洞」）
- (2) 個人蔵「東都大震災過眼録」大阪人権博物館 1997 年展示（「東都大震災過眼録 大正十三年三月中旬 白洞生写 於上総土気 郷天真草舎」）
- (3) 東京都慰霊堂保管「東都大震災過眼録」第3巻（東都大震災過眼録 卷三 六合齋士黄丘山人写 於吾妻台下 郷天真草舎）
- (4) 国立歴史民俗博物館蔵「東都大震災過眼録」1 帖（仮題，外題，内題とも記銘なし，折本で，22 枚からなる画帖，以下では歴博蔵と略称する）

以上の4件6巻の刊記から，震災の年の暮れに全3巻の絵巻を仕上げ，翌1924年3月中旬に至って，(2)の1巻のみを千葉の土気で仕上げ，時期は不明だが，(3)の慰霊堂保管第3巻を吾妻台下で仕上げたことが判るが，当時震災記念堂にこの絵巻の第1，2巻が同時に寄贈されていたのかどうかは現在不明である．後に考察するように，震災記念堂には第3巻のみが寄贈された可能性が高い．歴博蔵の画帖は，絵画の切り取り方から推して，上記(2)，(3)より後に作成されたものではないかと推定される．

さて，ここでは関東大震災はどのように描かれているのかを検討する．

震災発生の1923年12月に完成させた全3巻の絵巻がそれ以降の三作品の原本と目されることから，まず，萱原家蔵全3巻の内容をみておきたい．この作品は白洞の長女礼子氏によれば，師山口多門の50周忌に萱原家に返却されたものだということであり，この間は師のところに保管されたままであったということである．

第1巻は地震発生，第2巻はこの間に起きた悲劇的トピックス，第3巻はさらに続く混乱と終息へ向かう様子，そして被服廠での供養で巻を閉じる．時間的経過を踏まえ，その過程で発生した事件を折り込んだ物語が語られる構成である．

第1巻は，大地震発生（9月1日）で人々が避難する様子を描く．震災当時，第1次大戦後の軽佻浮薄な世相を糾すものとして，地震を天の諫めとする天譴論が唱えられた．作者白洞もまず仏神の怒りとして震災絵巻を描き起こす．憤怒の不動明王が射る火矢は避難する人々の牽く大八車の荷や布団に取り付き，燃え上がる．また，眷属も火の付いた輪宝を投げつけ，それらは雲に乗って地上に落ち，地震で倒れた家屋や樹木に振り落とされる．人々は逃げる．焰は勢いを増し，やがて火災旋風によって人々は空中に舞い上がり，そして地に打ち付けられる．まさに天変地変の大災害の始まりの様相を伝えて最初の巻は終わる（口絵1，2参照）．

続く第2巻の当初も，仏神の怒りは収まらず，三面六臂の明王は輪宝を天下に投げて，人々の回心を迫る様子で始まる．永代橋は橋の両詰，つまり，浅草側からの渡ろうとする人と，本所・深川から西へ逃げようとする人々が橋の上で鈴なりとなり，火の付いた橋桁とともに橋上の人々は川中へ落とされた．この悲劇は地震発生から遅くとも4時間後に起きていると考えられる．隅田川には焰を逃れて飛び込む人々も多かったが，川の水も燃え盛る焰で熱くなり，逃げ場を失った人々が川の中で命を落とした．人々の家々も地震で崩れ，火が廻り，焼け崩れた．出動した警官が瓦礫の下になった人々の救出活動を行うが，命を落とした人々の灰色に塗られた身体があちこちに散乱した様子が描かれ

る。戒厳令は2日発令された。これによって5万人という規模の軍隊が全国から東京、横浜に続々集結を始める。第1師団第1聯隊のテント張りの詰所が描かれる。うどんの看板を出す焼トタンの小屋、焼け爛れた煉瓦の壁が描かれて第2巻は幕を閉じる（口絵3参照）。第3巻は穏やかな聖観音像ではじまる。もはや神の怒りも鎮まり、やがて訪れる災後の瞬時の平穏を予測させるが、実は悲劇も描かれる。避難途中で別れ別れになった親子、兄弟は、名前を書いた板切れなどを掲げて街々を探し回る。目敏い小商人は西瓜や酒を売りはじめる。一方、町々に設けられた自警団、あるいは消防団の法被を着て、槍や刀、御用提灯を掲げた男たちが流言に躍らされて朝鮮人を捕らえ、彼らを後ろ手に縛り上げる様子が描かれている。場面は展開して、やがて、学校も再開され落ち着きを取り戻し、悲劇の被服廠跡では四十九日の法会が営まれるところで3巻が幕を閉じる（口絵4参照）。

この全3巻は恐らく震災発生から後50日ほどの期間を中心に、時間的経緯に即しながらも、必ずしも時系列に描かれてはいないが、口々に説かれた事件や震災風景が罹災した庶民の動きを中心に描かれたものである。特徴的なことは、三越など呉服店からデパートへ変身を遂げつつあった銀座周辺、あるいは丸の内の警視庁、東京會館、あるいは中央省庁などの巨大な建造物の崩壊、焼失は永代橋の崩落を除いてはほとんど登場しない。画題の中心はあくまでも圧倒的多数の罹災民である。それも個々の顔は目、鼻、口が細い筆で書き込まれただけの個性を打ち消した群集として描かれていることである。これほどに被災群集という存在を中心に描いた震災画は他に例を見ないといえる。

1-2. 作者萱原白洞について

さて、ここで、作者萱原白洞、すなわち黄丘について、先行研究が明らかにしたところを紹介しておきたい。

すでに述べたように仲間恵子氏による白洞の調査によって明らかになった点は以下の通りである。

萱原白洞（かやはら はくどう）、香川県綾歌郡生まれ、1896年2月18日生まれ、小学校教員を経て20歳で上京、日本画家山内多門（1877～1932）に師事、1923年の震災当時、東京市淀橋町柏木に居住、自らも罹災したとされる。罹災後身を寄せた千葉の土気時代は白洞を号し、1929年結婚後は黄丘と号した。白洞は中央画壇に属さず、南画、日本画をものし、金銭などに無欲で豪放磊落、酒を愛し、幅広い交際を持った人物と紹介されている。⁽³⁾

なお、その後、白洞の出身地香川県在住の歴史家石井雍大氏が克明に白洞の履歴を追っている。それによれば、生地は綾歌郡山田村大字東分3番戸、萱原伝五郎、母クニの次男として出生。小学校教員をしていたという事実はないと石井氏は調査から結論付けている。上京は1916年9月26日、竹尾20歳であった。落ち着いた先は豊多摩郡淀橋町大字柏木896番地、川合玉堂の門下であった山内多門に師事した。⁽⁴⁾

1-3. 「東都大震災過眼録」大阪人権博物館 1997年展示、個人蔵

（「東都大震災過眼録 大正十三年三月中旬 白洞生写 於上総土気 郷天真草舎」）

この作品については、阪神大震災で古本市場に登場し、震災2年後の1997年1月17日から2週間、大阪リパティホールで特別公開されたという曰く因縁がある。再度、仲間氏の論考によって、この間の事情を窺うことにしたい。

1995年の震災時に神戸で罹災した民家から出たもので、1996年11月末、日本玩具史研究家多田敏捷氏によって発見された資料だということである。

この絵巻は(1)の萱原家蔵の全3巻が描かれた関東大震災の年に描かれたものより少なくとも3ヶ月を経て千葉県で書かれたものであることが末尾の記録によって判明している。この巻は萱原家蔵の第3巻にあたる震災直後の混乱期を経た後の落ち着きを取り戻した罹災民の様子を中心に描かれているが、仲間氏、石井氏、それに新井氏が注目した自警団による朝鮮人捕縛の様子が描かれていることで大きな話題を呼んだ描写が加わる。この部分については絵巻の範囲を区切って(日本刀を持って左へ向かう人から「社会奉仕」の食料配給所から右に向かう人々まで)、仲間氏が詳細に分析されている。それによれば、登場人物は140人、服装は黒い法被、水色の法被を着た消防団が81人、日常着(和服)が54人、白い制服を着た巡査が4人、チョゴリを着た人が2人。このうち、武器に相当するものを持っている者は日本刀の消防団17人と和服姿3人、鳶口の消防団13人と和服姿4人、竹槍・棍棒の消防団21人と和服10人、サーベルの巡査が3人と分析している。倒れている人(負傷者か死者)と死体は23人、消防団9人と和服姿14人で、武器を持った人に襲われている人は、消防団法被姿1人と和服姿5人と数えている。後ろ手に縛られて連れて行かれる人は、消防団の法被を着た2人とチョゴリを着た2人と分析された(図4参照)。

カウントされた人数などに異論はないが、法被を着ている人々がすべて消防団員ではないと思われる。この時期、人々は勤め先の商店などの名入りの法被を着る、あるいは半纏を着る職人などいわば社会的立場を表す一種の制服でもあったわけだから、法被を着ている人々が消防団員とは限らない。それに消防団員が消防団員に打擲されるというのもこの場面では理屈に合わないのではないかと思う。

チョゴリを着た男女2人がなぜ後ろ手を縛られて引っ張られるのかということから、朝鮮人虐殺の問題へ論文が展開されていく。仲間氏は、白洞の絵巻には朝鮮人の虐殺現場そのものが描かれているわけではないが、明らかにそこに導かれる状態を描くものとして、他の作家も描くことを避けた場面を描いた歴史の証言として高い評価を与えている。

では、(1)の萱原家蔵の第3巻に描かれた自警団の場面と比較してみよう(鳶口を持ち左方向へ向



図4 「東都大震災過眼録」 第3巻 (1997年大阪人権博物館展示)



図5 「東都大震災過眼録」 第3巻 (萱原家蔵)

かう一群の群集から自警集団の場所で起きている事件現場へと右方向へ向かう人々まで)。この範囲に登場する人々の数は、鳶口・日本刀・棍棒などの武器に相当するものを持った人83人、自警団の高張り提灯をもった人4人の計87人、後ろ手を縛られた10人と今まさに手を縛られて連行される3人の計13人、それにサーベルを着けた白い夏服の警官1人である。土気で描かれた時期のものに比べ、震災の年に描かれた第3巻では圧倒的に描かれる群衆の数が少なく、また、負傷者や死者を思わせる倒れている人も描かれていない。チマチョゴリも登場しない。それに背景は夜を思わせる闇として描かれてはいないのである（図5参照）。

したがって、震災の年のものと、それから3ヶ月を経て描かれたものとの違いが示すものは、この事件現場の記憶が薄れるのではなく、却って多くの新しい事態が描き込まれたわけであり、その意味は小さくはないだろう。そこに作者白洞が震災絵巻のこの場面を書き換えたいと思うに至る抑えがたい感情の動きがあるように感じられる。

しかしながら、次に検討する(3)の東京都慰霊堂保管の「東都大震災過眼録」第3巻にはこの自警団による朝鮮人捕縛の場面は描かれていない。

1-4. 東京都慰霊堂保管「東都大震災過眼録」第3巻

この巻の末尾に「東都大震災過眼録 巻三 六合醸士黄丘山人写 於吾妻台下 郷天真草舎」に銘記されているところから、この絵巻は黄丘と号するようになってから作成されたものであるとすれば、制作時期は結婚後の1929年以降ということになる。吾妻台下とはどこに居住していた時のものか現在のところ不明である。六合醸士とは六合の酒を好んで飲むという程度の意味であろうから、酒好きの白洞ならではの名乗りではないだろうか。1929年以降ということになれば、震災復興祭が1930年に行われ、震災記念堂の完成が1931年であったから、震災記念堂に寄贈する目的で作成されたと解すれば時期的には符号する。

さて、混乱から鎮静化へ向かう段階の絵巻として特徴的な点はどうであろうか。

まず、(1)の全3巻の最後の巻、および(2)の個人蔵の絵巻と同様、聖観音が描かれて、ひとまず震災の混乱が沈静化したことを予測させる。

最初の群像として描かれるのは「尋ね人 ○○○」と書いた板切れなどを掲げて歩く一群と出会え

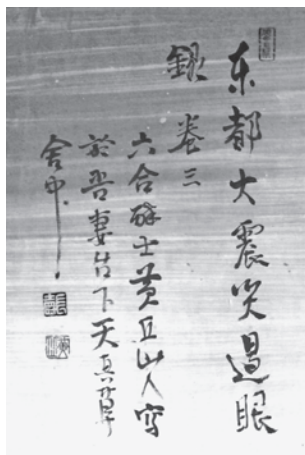


図6 「東都大震災過眼録」第3巻（署名部分）

て喜び合う人々の姿である。当時の記録などからはこうして人探しをした経験がかなり一般的であった。「△△立退所」を掲げるバラックも見られる。飯炊きのコンロが据えられ、牛めし、すし、うどん、そばなどのいわばファーストフードの仮店もできて、バラック生活もかなり慣れてきた様子である。風呂敷を斜交いに背負い買出しに出かける男女の姿も描かれる。散髪には格安10銭の看板を掲げる床屋も商売をはじめた。一方配給所には米俵が山と積まれ、竈に握飯の飯炊きをする人も居る。ここでは番傘に尋ね人の名前を書いて人探しをする人も描かれる。この年は西瓜も梨も豊作であったというが、水の代わりに西瓜が良く売れた模様である。ウィスキーやぶどう酒を売る店も登場する。炊き上がった米は女たちの所へ運ばれて握飯が作られる。もはや、第2巻に描か

れたような食料の争奪戦もなく、穏やかに落ち着いて握飯を受け取る人々の様子が描かれる。他の巻に登場する復興小学校の野外授業の光景はここでは省略されている。そして、「南妙法蓮華經」あるいは「南無阿弥陀仏」の幡を掲げて、法要が営まれる被服廠跡へ急ぐ人が三々五々描かれ、山と積まれた遺骨の場面で終わる。被服廠跡地は3万8千あるいは4万人といわれる人がここで焼死したが、他のところで亡くなった人々の遺骸も持ち込まれ、約1週間を掛けて焼かれた場所である。ほとんどの人々は名前もわからないままに焼かれた。現在、その結果、慰霊堂納骨堂には震災で亡くなった5万7千体の遺骨が納められることになったのである。

それはさておき、ここにはひたすら穏やかな生活を取り戻しつつある人々の様子が描かれる。震災後1、2ヶ月の間にそうした事態が実際に実現したとはいえないが、この頃には内務省や東京市などが建てる公設バラックがほぼ整えられた段階である。しかし、そうした光景を作者は描こうとはしていない。あくまでも罹災者が作り出す自前の生活に終始した。そのことは、これら一群の絵巻に一貫して流れている。また、自警団一朝鮮人を描く細部の書き換えが行われていることなど、震災直後、実地見聞をした白洞が眼にした光景への強いこだわりが感じられるのである。

では、最後に、画帖仕立ての「東都大震災過眼録」をみておくことにしよう。

1-5. 国立歴史民俗博物館蔵（歴博）「東都大震災過眼録」1帖

2000年に古本市場に出たものを購入したとされる1品である。これは卷子仕立てではなくこれまで見てきた(1)の全3巻、(2)の1巻から話題となる場面を集めた22点から構成されている。最初の1枚は(1)で第2巻の頭に登場した三面六臂の怒れる明王像である。地震で崩壊する家屋、火災旋風に襲われる人々、馬、必死の思いで逃げ延びようとする人、倒壊する橋、橋が落ちて川に流される死体、なおも襲う火災旋風から子供を抱きかかえ、倒れる人を救いつつ逃れようとする人々、やがて軍隊によって怪我人が救出され、戒厳司令部の出張するテントが張られて、鎮静化が図られた。軍隊が警護するなかでの炊出し、多くの人々が殺到する食料配給などの混乱状態が描かれる。水も配給される。自警団の詰所辺りでは誰何されて怪しまれた人々が鳶口や日本刀を持った人々に殴られ、倒れた12人の人が描かれる。ここには、後ろ手に縛られ鳶口で殴られる母親に縋り付く幼児一人も含まれる。首を槍で突かれている人も描かれるが、サーベルを掲げる白服の警官は止めるわけでもなく、見守る。スイトンやうどんのバラック店も張られ、ついで江東橋小学校の野外授業の光景が描かれる。小学校の授業開始は



図7 歴博蔵「東都大震災過眼録」画帖（軍隊救出部分）



図8 歴博蔵「東都大震災過眼録」画帖（自警団部分）

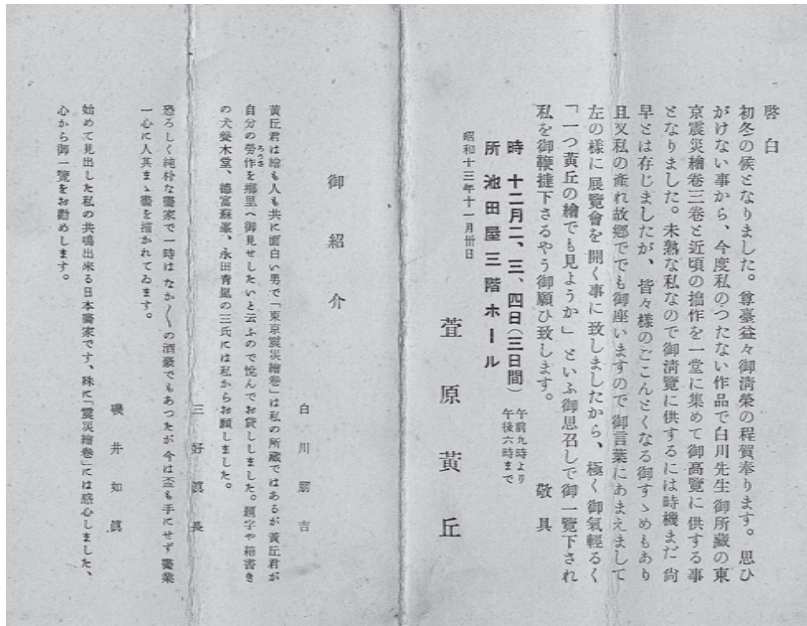


図9 萱原黄丘展覧会案内状

9月25日からであった。震災前に比べ欠けた児童も少なくなかった。散髪をする穏やかな光景、最後に被服廠と思しき供養の場が描かれて終る。

以上の説明により、この巻はこれまで掲げた絵巻のそれぞれから抜書きしたものを画帖仕立てにまとめ、地震発生→火災旋風→人々の避難の苦難→戒厳令下の光景→軍隊に警護されての炊出し→自警団による暴行→バラック生活→

小学校の再開→被服廠での供養のほぼ震災発生から1、2ヶ月頃までの罹災者の一連の流れを描いたものであったことがわかる。

さて、こうした絵画はどのようにして人々の目に触れたのだろうか。

白洞は黄丘と号するようになってすでに10年を過ぎようとしていた1938年（昭和13年）12月2～4日の3日間、高松市の池田屋でその他の近作とともに展示された。その案内状が萱原家に残されている。それによれば、「東京震災絵巻」すなわち「東都大震災過眼録」全3巻は白川朋吉の所蔵となっているが、黄丘のたつての願いで郷里香川の展覧会でこの作品も郷里の人々にみせたいというので貸したと説明され、白川による推薦の言葉のほか、白川から題字、箱書きは当時の著名な政治家犬養毅木堂、徳富蘇峰、永田青嵐（1876-1943、震災時東京市長）に頼んだものとされている。この他、三好眞長、磯井女真の画家2名による賛辞が寄せられた案内状である。白川朋吉（1873～1963）については、前掲石井雍大氏の論文に詳しい。それによれば、同じく香川県の観音寺市出身、弁護士、実業家、大阪弁護士会会長、大阪市会議長、関西大学理事などの要職を勤めた人物で、一方では、大正、昭和の日本画家のコレクターとして1923年大阪市美術協会設立に尽力したという。また、白川は度々の筆禍事件で著名な宮武外骨の弁護を引き受けるなど筋の通った主張を持つ弁護士であったとされる。こうした人物であったから、「東都大震災過眼録」全3巻を白川が所有していたことも不思議ではないと石井氏は推測している。萱原家によれば、白川とは交流も続いたし、また、黄丘のパトロンの一人だったという。阪神大震災をきっかけに市場に出た「東都大震災過眼録」はこのうちの一つではなかったかと石井氏は推定している。

2-1. 「関東大震災画帖」

『関東大震災画帖』（金尾文淵堂発行、大正12年10月25日）について検討する。この画帖については、刊行された印刷本とその原画62点が立命館大学歴史都市防災研究センターに所蔵されている。すでに昨年4月9日～5月9日の間、同センターにおいて、「地図を通して見る関東大震災」展

として、被害地点の写真（絵葉書写真と現在状態）と絵画を地図に落としたものを中心に展示された。

発行所金尾文淵堂は東京市麴町だが、震災で被災したため、印刷は京都新町通り竹屋町南入の便利堂中村弥左衛門で行われ、早くも10月25日には刊行された。

画家は10画伯と表紙には謳われているが、原画の作者の落款あるいは署名は、Reisuke-Niwa（丹羽禮介）、Yoshisuke-Kato（加藤義助）、㊦（赤塚忠一）、㊧（中澤弘光）などが確認できるが、無署名のものも含まれる。ただし、巻末の目次によって、上記画家の他、赤城泰舒、中澤弘光、幡恒春、水島爾保布、清水吉臣、清水吉康の画家が判明する。このうち、もっとも多いのは東京市内を中心に担当した丹羽禮介（白馬会）の35点、被害も大きく地変が多く認められた千葉県の館山などを担当した赤塚忠一の10点、横浜、小田原、箱根、鎌倉などを担当したのは加藤義助の5点、取材途上自警団に殴打されつつスケッチをした幡恒春3点、日比谷公園のバラックなどを描いた赤城泰舒（1889-1995、水彩画家雑誌「みづゑ」編集）2点、表現派そのものと評されるスケッチをなした水島爾保布（1884-1958、画家、小説家、新聞社挿絵画家）、装丁などを担当した中澤弘光（1874-1964、洋画家、白馬会・光風会）、東京、関東の被害地パノラマ図を担当した清水吉臣、清水吉康などの作品で構成された画帖である。

2-2. 描画の内容

各描画については、末尾の表1の一覧に示した。巻頭には9月12日の震災の東京を復興させ帝都とする旨の詔書を掲げた。続く3点は貞明皇后の日赤病院行啓（9月30日）、摂政宮の巡幸（9月15日、18日のうち、描画は15日の銀座付近）、婚約が成立、震災のため結婚式は延期され、震災翌年の1月に行われることになった摂政宮妃の救援活動の様子を描く。これらは公開された写真に基づくものであり、当面除外する。最後に掲載された関東大震災被害地域のパノラマ図5点も、当時出版されたものからの写しであり、画家の創意に基づくものではないので、これら計8点を除くと、描画55点となる。これら55点の描画の大まかな傾向は、倒壊した建物や亀裂の入った道路などをスケッチしたもの27点で全体の半分以上を占め、次いで避難者のさまざまな様子をスケッチしたもの21点は全体の40%近くに当たるから、ほとんどが倒壊建物、避難者に集中しているといえる。他に、被服廠、吉原弁天池などの惨状を描くもの5点、残りは警護、救助活動の兵士・警官の2点となる。倒壊、焼失などの建物などはこれまた、当時絵葉書写真で流布していたものと同工異曲の題材である。もちろん、画家たちの実際の見聞を否定するものではないが、37点の東京に限ると、描かれた題材としては特に目新しいものはない。横浜、鎌倉、小田原も点数はごく少ないが当時写真集などに掲載された著名な場所であり、一般的にはこうした被害状況は知られていた。しかしながら、地盤の隆起による大規模な地変が起きた千葉館山周辺の赤塚忠一の10点のスケッチ、丹羽禮介による中央線余瀨駅の損壊の模様を描く2点などは流布した写真絵葉書などからの写しではなく、実地の見聞に基づくものと考えられる。

この画帖には付録として、絵葉書引き換え券が付いていて、金尾文淵堂宛の大阪出張所宛に葉書を送ると、中澤弘光と丹羽禮介の1組4枚の絵葉書が得られることになっていた。こうした読者サービスについては、絵画の大衆化という点で見過すことはできないので、後述したい。

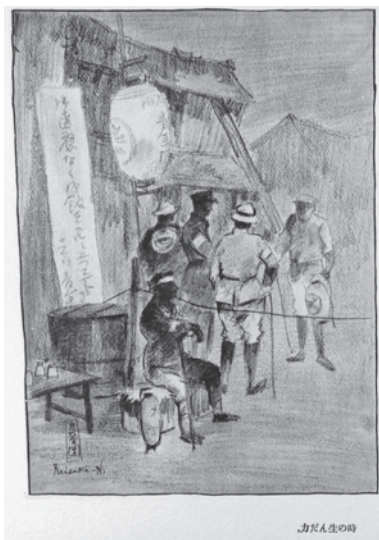


図10 幡恒春「日暮里の夜警団」



図11 赤城泰舒「日比谷所見」(緑陰の床屋)



図12 赤城泰舒「宮城前避難天幕」



図13 水島爾保布「帝国ホテルから逃れた外人」



図14 丹羽禮介「親は子を子は親を連日尋ね歩く人探し」

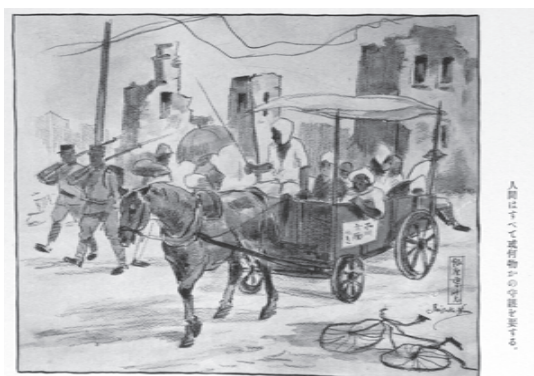


図15 丹羽禮介「肥へ車に人を乗せて俄作りの馬車」



図16 丹羽禮介「戒厳令下の自警団」

図10～16 『関東大震災画帖』(立命館大学歴史都市防災研究センター蔵)

大阪を中心とする関西における読者層，さらには広く震災地以外の地方の読者を狙ったものではないかと推定される．恐らく，関東地方のこの大震災について新聞で報道されるだけの情報とは別種の震災地のなまの情報を求める欲求に応えるべく制作されたと考えてよいかもしれない．だとすれば，先に検討した「東都大震災過眼録」は読者を予定して制作されたものではなく，ひたすら己の眼で実際に見たものを描こうという情熱で描いた作品と同列に比較することはいささか当を欠くものであるかもしれない．

ここでは，「東都大震災過眼録」に描かれている対象と共通する避難民の状態を描くものを7点を挙げておくことにする（図10～16参照）．

3-1. 『大正震災木版画集』

東京本郷湯島切通の画報社から出版された木版画集である．1924年1月から12月まで毎月3点の版画を予約販売するものであるが，その「開版稟告」なるものに刊行の趣意が謳われているので，まず，その刊行の意図を聴いてみることにしたい．

ここで主張されていることは3点ある．一つは地震という自然の脅威に翻弄された罹災者は自然の恩恵に思いを致す余裕はないが，自然の「慈泉」に浴す機会を作ることは芸術家が今為すべきことであり，二つ目には，芸報社は忘れられていた木版画の機運が再び熟し作家が出始めた現状に鑑み，三つ目には民衆的娯楽の木版画でこの大厄災を芸術化する目的を以て刊行するというものである．磯田長秋，西澤笛畝，織田観潮，川崎小虎，田村彩天，桐谷洗鱗の各氏の震災風景の作品を3点ずつ毎月配布するというものである．彫師長島鬼一，摺師田村鐵之助．代金は1回1円50銭，12回分の前金17円である．作品の一欄表は表2にまとめた．第1回頒布は1924年1月15日であった．

磯田長秋（1880-1947，日本画家，帝展委員），西澤笛畝（1889-1965，日本画家，帝展審査員），織田観潮（1889-1961，日展委員），川崎小虎（1886-1977，東京美術学校教授），田村彩天（1889-1933，帝展審査委員），桐谷洗鱗（1877-1932，仏教画家），これらの画家の年齢層から察するに，30代後半～40代に掛けてもっとも油の乗った作家たちであった．

3-2. 木版画の画題

版画が対象とした画題を大まかに建物などの倒壊と避難民の生活を描いたものに分けると，29点のうち，20点が建物など構造物の倒壊であり，避難民の生活を描くものは9点となる．ほぼ3分2

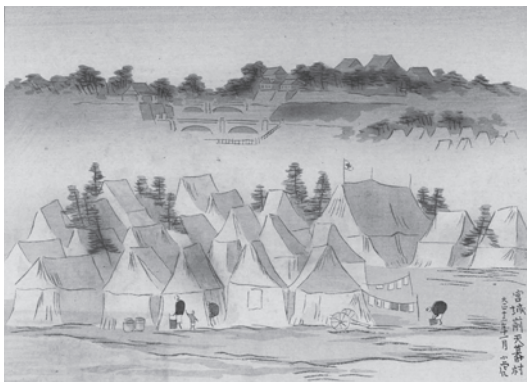


図17 川崎小虎「宮城前天幕村」



図18 磯田長秋「運送馬車(京橋通)」



図 19 田村彩天「夕陽に映ゆる女神像
(神田仏英女学校跡)」



図 20 桐谷洗鱗「西郷の銅像 (上野公園)」



図 21 西澤笛畝「黄昏るゝ頃 (日本橋)」

図 17～21 『大正震災木版画集』(立命館大学歴史都市防災研究センター蔵)

を占める震災で損壊を受けた建物などは、版画が頒布され始めた時期にはすでに整理され、復興事業が着手され始めていた。この版画集がいつ頃から構想され、画家への依頼がはじめられたのか不明だが、第1回頒布が1924年1月であることから、震災直後ではないにしてもそれほど時を隔てずに構想され、依頼された画家たちは早くから自らの画題の選定については必要な作業が進められていたと考えられる。しかし、かれらの選んだ画題の大半が倒壊した建物群であったことはある種の意味が込められているとみなされるのである。それは、「東都大震災過眼録」との比較において考えられることである。震災の現場を体験するといってもこの大震災ではその内容は多様であったはずである。しかし、この版画集の作家たちは自らも被災した体験を持つ者もいたと思われるが、やはり、依頼された仕事であったから、震災を象徴するような浅草仲見世、吉原遊郭、三越、日本橋、銀座、築地など“震災名所”とも呼ぶべきものを選んでいく。それに対して、「東都大震災過眼録」の描く震災場面は火災に迫られ、住処を求めてさ迷う庶民の群像であった。震災像として絵画に結実されたこの違いは大きいと思われるのである。比較するために、当時写真の対象となった一般に知られた震災被害の、いわば“震災名所”をここに選んで掲げておいた(口絵8～12・図17～21参照)。

4. まとめに換えて

最後に池田遙邨(1895～1988)の「災禍の跡」の制作過程についての考察を踏まえて本稿のまとめとすることにしたい。関東大震災を印象づけるものとして、この「災禍の跡」はすでに著名な作品である。実際にみせていただきたいと思い、倉敷市立美術館に出かけて、400点に近い震災のスケッチが残されたという事実を教えられた。それら多数のスケッチにはほとんど人物が登場しないのに、「災禍の跡」として結実した作品には震災の廃墟のなかに見るものに迫ってくるようにして立つ4人の家族から、震災で受けた打撃の悲しみと怒りをぶつけられるような痛さを感じた。作者遙邨はこの絵を完成させるまで1ケ年を要したということに、震災の作品化に懸けた作者の思いの強さ、芸術というものの具体的な形がここにあるのかとも思えたのである(口絵6参照)。



図 22 池田遙邨「災禍の跡」(倉敷市立美術館蔵), 口絵 6 参照

すでにこの作品、および遙邨の関東大震災の探訪スケッチについては、前田興氏の論稿⁽⁵⁾があり、また、遙邨に関する資料集も編まれていて、震災前後のことが知られる。ここではそれらによって、簡単に「災禍の跡」の制作に関する紹介をすることにしたい。⁽⁶⁾

遙邨は 15 歳(1910 年)で大阪の松原三五郎の天彩画塾に入門、20 歳で岡山輜重兵第 17 大隊に入隊、兵役終了後日本画を独学、24 歳(1919 年)で京都画壇の竹内栖鳳の画塾竹杖会に入門。以下に、震災写生の思い出が実感を以て語られる部分を引用しておきたい。⁽⁷⁾

震災の日から 20 日後に鹿子木孟郎先生に誘われて震災地の写生に同行した。……東京へ着いてからの写生には先生の弟子であった中田、林の両君も参加して四人の一行はなるだけ集団になって出かけた。すでに流言浮説があって戒厳令がしかれた殺伐たる中での写生は、身の危険性を覚悟しておらねばならない、……写生をしている足もとへとつぜん瓦が飛んできてとび散ったりした。……途方にくれている人々のやり場のない怒りが心に喰入るようで、写生半ば黙礼してその場を去った。ある時はけわしい容相で側へきて「なんの為に写生なんかやっているのか——」と今にも暴力を受けそうな気配さえ感じた。何日目かに先生が朝日新聞社報道員と書いた腕章を、社から貰ってこられたのでその後はようやく写生に専念することができた。

鹿子木孟郎(1874~1941)は同じく天彩画塾に属した先輩にあたる。彼に同行して震災地の横浜、東京に入り、約 1 ヶ月を費やしてスケッチ 400 点あまりを為したという。ここに語られているような事実は震災地に入ったカメラマンなども同様の経験をしており、実際に殴られたケースもあった。⁽⁸⁾ともかく、1 ヶ月あまり経っても震災現場は殺気立っていたのである。

さて、池田遙邨の一行は吉原遊郭の遊女の溺死体などで一杯になったという弁天池も訪れている。遙邨の吉原のスケッチは 8 点ほどに及び、このほか、さまざまな角度から廃墟のさまを描き、また稀ながら避難民の姿を描く 1 点も残されている。被服廠も訪れたが、「簡単な板囲いの中から濛々と線香の煙が立昇り、あたりは異臭が鼻頭を強くついて長くは居たたまらなかった。」と記している。上野公園にも行った。震災地として著名になった場所には足を踏み入れ、スケッチを試みているのであ



図 23 池田遙邨 素描「東京吉原遊廓跡」



図 24 池田遙邨 素描「東京新吉原」



図 26 池田遙邨 素描「東京新吉原遊廓」



図 25 池田遙邨 素描「東京浅草千束町附近罹災民小屋」



図 27 池田遙邨 素描「避難者 東京新大久保駅にて」

図 23～27 池田遙邨素描（京都国立近代美術館蔵）

る。これらの場所は絵葉書写真でも広く知られた場所であったことはこれまでの作品群からも察せられることである。これらの震災スケッチを東京市から依頼されて出品したとも述べている。

その翌年（1924 年—引用者注記）東京市主催で大震災記念物展示会がひらかれたのへ、私にも依頼状がきて写生二十枚ばかりを出陳したが、その年の秋の帝展に六曲一隻の大画面へ月夜の震災跡風景を出品し、見事に落選したのを岡山の天満屋百貨店で私の個展へ出品したところ「この画だけはたたんで置いてくれないと恐しくて巡回できない——」と夜警人が訴えた。この作は

一生の想出の記念として今も私蔵している。

この「災禍の跡」はスケッチをした翌年の秋の帝展に出品して落選したが、この作品に懸けた遙邨の画家としての苦悩は、前田氏が論文で指摘されたように「洋画の写実性に飽き足らなくなった」試行錯誤の跡が「画稿」6点に十分伺うことができる。ムンクの影響そのままの「震災の跡」も描かれている（口絵5参照）。前田氏は「遙邨の震災の絵は、写生から始まってイメージの中で再構成されることによって、より強烈に鑑賞者に自然災害の恐ろしさ悲惨さを訴える力を持った⁽⁹⁾」と指摘されている。

わたしにとって興味深いのは、「画稿3」の右と左の両側に完成作ではみられない西洋風の怒れる神のような像が2体描かれていることである（口絵7参照）。まさに、人知を超えた大厄災は神の怒りとしてしかいいあらわしようがないとして、萱原白洞が「東都大震災過眼録」の最初に描く不動明王に託したものと共通するものがある。震災をどう受けとめるかは画家たちにとっても大きな問題であったのである。

さて、ここまでさまざまな震災絵画を見てきたが、画題としては震災を象徴するような有名な建物群の倒壊のありさまと避難民のふたつに絞られるといっていよう。販売を目的として画家たちに依頼して描かれた画題は、一般的に知れ渡ったいわば「震災名所」が多いといえる。また、避難民が描かれるにしてもバラックでの生活を対象としたものであり、その意味では震災の情報を伝える目的を併せ持つ。これらの一群の震災画は制作、発売時期も早い。これに対して、いわば人のために描くのではなく、自己の見聞を内省化させ描かれるものにはそれ相応の時間が掛けられなくてはならないから、震災発生からの時間的隔たりも大きい。そして、これらの絵画は結局のところ、集団であれ、個であれ、人に収斂する。「災禍の跡」の400点のスケッチには人物が描かれていることは極めて稀で、ほとんどは荒野と化した震災の廃墟がさまざまな角度から描かれているが、結実した完成作では4人の人物が低く引かれた地平線に点在する廃墟を背景に屹立するかのごとく描かれている。スケッチと完成作との間の質的な差は大きいと考える。そこには自然災害によってもっとも打撃を受けるのは人であるというメッセージが込められているかのようである。

さて、最後に大衆へ直接呼びかけることを意図した震災漫画の作品群を紹介しておく。先にみた『関東大震災画帖』の姉妹編ともいえるべきものとして『日本漫画会大震災画集』（金尾文淵堂、1923年11月）がある。これは『関東大震災画帖』に日比谷公園所見として帝国ホテルの外国人を表現派タッチで描いた水島爾保布が巻頭言を書いている。それによれば、日本漫画会（1923年設立）同人が地震後いくらか経たない時に明治神宮外苑の芝原に集まって協議、震災漫画展覧会を協議したことから始まったという。変災という試練に遭遇して当面したことを描写して発表するのは書画、漫画家の責任だとしている。10日後には90点の作品が持ち寄られ、10月10日前後に開催の予定だったが、11月半ばになって大阪三越呉服店で開催に漕ぎ着けた。また、東京を焼け出され大阪に仮出版部を設けていた文淵堂が展覧会の画集の出版を申し込んできたという出版経緯が述べられている。印刷所は『関東大震災画帖』と同じく、京都の便利堂である。

ここに出品している漫画会同人は水島のほか、池部鈞（国民新聞社漫画記者）、池田永治（1889～1950）、服部亮秀（1887～1955）、小川治平（1887～1925）、細木原青起（1885～1958）、前川千帆

(1888～1960), 在田稗 (1890～?), 宮尾重雄 (1902～1982), 下川凹天, 宍戸左行 (1888～1969), 森嶋直三, 森火山であるが, このうち, 服部は朝日新聞社, 細木原は「主婦之友」の挿絵画家, 前川は読売新聞社, 宮尾は中央新聞社, 水島は大阪朝日新聞社, 下川は東京毎夕新聞社など, 時事漫画あるいは新聞小説の挿絵などを担当する面々であった。⁽¹⁰⁾ したがって, すんなりと情景を描くという手合いのものばかりではなく, 服部亮秀の「震災絵巻」では, 「神經過敏, あやしき者は犬一匹」, あるいは小川治平「震災最中に出来たぶるぶる内閣」など風刺の効いたものが何点か挿入されている。ここで, 注目しておきたいのは, ここでも震災漫画 1 組の絵葉書引き換え券が付けられている点である。

池田遙邨年譜によれば, 震災の東京を先輩の鹿子木と 1 ヶ月間写生した成果を翌年の 1924 年 4 月姫路・総社公德殿と城山興雲閣において「震災スケッチ」展として開催している。⁽¹¹⁾

その折のものと思われる絵葉書が前掲前田興氏の論稿に掲載されている。⁽¹²⁾ 震災の写真絵葉書が大量に出回ったことはすでによく知られた事実であるが, 絵葉書は博覧会などのイベントでは必ず制作され, 大量に流通していた。イベントに限らず, 作品展覧会などにおいてはただ絵画を眺めるだけでなく, 観客にとっては複製とはいえず手にとって見ることができ, 我が物として掌中に納めることのできる媒体としての絵葉書の役割について, “観衆” という語を使いながら新しい視点からの意義が指摘されてもいる。⁽¹³⁾ 大量生産がまさに大正期の大衆文化を創りだして行く時期であり, 震災のイメージが広く社会化されている機会は, 写真絵葉書に限らず, こうした展覧会, 画集なども担っていたのである。

なお, 今回は対象とすることは出来なかった作品も多数残されている。⁽¹⁴⁾

震災の前・後として文化のひとつの画期であったことは従来から指摘されながら, 震災文化そのものが具体的なレベルで取り上げられることが少なかったように思われる。課題はまだまだ山積しているのである。

表1 「関東大震災画帖」画像一覧 立命館大学歴史都市防災研究センター所蔵

No	校番	画像タイトル	絵師	画題名	画中釈文
0		関東大震災画帖 東京十画伯実写 金尾文淵堂発兌	表紙画 (カラー)		
0		関東大震災画帖 東京十画伯実写 金尾文淵堂発兌	表紙画 (中表紙)		
		詔書			
1		皇室	丹羽禮介	皇后陛下罹災傷病者を親しく御慰問遊ばさる	畏くも、幼きものの手を親しく執らせ給ひしと聞く。
2		皇室	丹羽禮介	摂政宮殿下災雪地御巡視	或日をのびまつりて。
3		皇室	丹羽禮介	良子女王殿下罹災民に衣服を恵まる	伝え聞くまを。
4		皇室・仲見世	丹羽禮介	浅草中見世跡にて	観音様は矢つ賑り人間を守るべく残らせられた。
5	1	吉原・弁天池	丹羽禮介	吉原遊郭	哀れなる女の群！ それは最後まで苦忍と惨虐、そのものであらねばならなかつた。
5	2	浅草	丹羽禮介	浅草公園にて	その日の後。
6	1	国技館	丹羽禮介	本所被服廠より国技館及両国駅跡を望む	残るもの。
6	2	深川・生活	丹羽禮介	深川猿江町方面にて	生きるといふことは遂にかかかものであるのか？
7	1	上野・避難者	丹羽禮介	途上所見	倒壊された地上をゆく人の子の姿、それは厳粛なものではあるが寂しく傷ましいものであつた。
7	2	九段・生活	丹羽禮介	九段にて	護国の神も再び人の世に哭したことであらう。
8	1	神田・生活	丹羽禮介	風呂場を掘出して行水	希求する力。
8	2	帝大	丹羽禮介	帝国大学校内にて	文教の最高を誇つたその建物も今は空しい。
9	1	鍋島邸	丹羽禮介	赤坂葵橋にて	残るもの。
9	2	砲兵工廠	丹羽禮介	飯田町駅より砲兵工廠を望む	雲のみ動く。
10	1	避難者	丹羽禮介	俄雨	何処までつらい自然の暴威であらう。
10	2	日本橋	丹羽禮介	猛火に包まれた日本橋大通	昨日まで繁華を誇つた市に、かうしたことを誰が考へ及ぼさう。人の世に生きる人の子の弱小なる姿よ。
11	1	被服廠	丹羽禮介	本所被服廠	やつと持出した自分達の携帯物から火を導かうとは誰一人知らなかつただらうに。
	2	避難者	丹羽禮介	避難小屋の暴風雨	何処まで？ そして果ては？
12	1	バラック	丹羽禮介	急造の飲食店	白米、それは何よりもありがたいものであつた。
	2	救護	丹羽禮介	救護団	すべては涙であつた。
13	1	三越	丹羽禮介	日本橋より外郎のみの三越を望む	文明とは果して何であつたらう。
	2	避難者	丹羽禮介	東京駅頭の避難民	破壊されたる地と破壊されない地、その間を、人間は動いた。
14	1	浅草	幡恒春	上野より蔵前を望む	此の二葉は、スケッチ中、〇〇と見誤られて幾百の群集及〇〇に取巻かれて、〇〇や武器によつて打ちのめされ流血の中に氣を失ひたる幡恒春氏の死を賭けての快作である。
	2	浅草	幡恒春	九月四日午後二時上野より浅草を望む	その遭難に遭ひたる氏は前夜はかくして自警団の一人として働いたものである。
	3	夜警	幡恒春	日暮里の避難兼見張所にて	かうした不自由の中にも……。
15	1	日比谷・生活	赤城泰舒	緑陰の床座日比谷所見	平素は許されないことも許される日がある。其の時が本当の人間生活であらうか？
	2	バラック	赤城泰舒	宮城前避難天幕	昨日までは碧をたたえた聖域も、かうして、殆ど原人に近い蒼生を以つて満された。
16		生活	中澤弘光	お濠の行水	
17	1	帝国ホテル	水島爾保布	日比谷公園前所見 帝国ホテルから逃れた外人	かうした中にも外人は一人一人婦人を抱えて居た。

No	枝番		画像タイトル	絵師	画中題名	画中釈文
	2	雲	表現派その儘	水島爾保布	表現派その儘	その日、その時
18	1	ニコライ堂	哀れ鐘も空しきニコライ堂	丹羽禮介	ニコライ会堂	鐘はならぬ！
	2	築地	築地水交社付近	丹羽禮介	築地水交社付近	金にあかして建てたものも、崩する時、無であつた。？
19	1	歌舞伎座	開場式も目前に迫りし歌舞伎座の焼跡	丹羽禮介	歌舞伎座	跡。
	2	銀座	日本一の大通りも今は………の銀座	丹羽禮介	銀座にて	花の都のまん中と、誰が今考へ得やう。
20	1	人探・生活	※親は子を子は親を連日尋ね歩く人探し	丹羽禮介	人探し	あてどもなく！
	2	馬車・生活	※肥へ車に人を乗せて俄作りの馬車	丹羽禮介	銀座通り所見	人間はすべて或何物かの守護を要する。
21	1	避難者	上野公園清水堂付近の避難民	丹羽禮介	上野清水堂	仏は何時の日も人間を護らせ給ふた。
	2	廢墟	羅馬の廢墟の如き築地	丹羽禮介	築地居留地にて	西洋的な廢滅の跡。
22	1	工兵	破壊されたる交通機関中に電信隊の活動	丹羽禮介	電信隊の活躍	戦時以上の苦闘である。
	2	自警団	※戒厳令下の自警団	丹羽禮介	自警団	時の生んだ力。
23	1	横浜駅	全市全滅の横浜駅前	加藤義助	横浜全焼之図	大を誇つた横浜の地上のありとあらゆるものは、かうして失はれて行つた。
	2	津波	五十尺の海嘯熱海を襲ふ	丹羽禮介	熱海の大海嘯	自然の魔力はかくしてすべてを失ひ尽さうとした。
24	1	生活	小田原御用邸御堀端	加藤義助	小田原御用邸御堀端にて	生きんとするもの。
	2	修次	箱根宮の下	加藤義助	宮の下の景	自然に帰れとてか？
25	1	八幡宮	歴史上の古跡も倒潰した鎌倉八幡宮	加藤義助	鎌倉八幡宮	歴史を飾るものは、更に破壊の歴史をも飾つた。
	2	大仏	台座の目前に目入込みたる鎌倉大仏	加藤義助	鎌倉大仏殿	御尊体は幸ふかう。
26	1	倒壊	房州那古観音堂	赤塚忠一	那古、観音の堂	仏は遂に小鳩が自分にとつては一番身近いものであつたことを知つた。
	2	倒壊	同 境内の小字	赤塚忠一	那古観音境内の小字	それは凡て恐ろしい破壊の普及であつた。が、信仰は壊れなかつたと見える。
	3	倒壊	同 那古の町	赤塚忠一	那古ノ町	求むる力。
27	1	倒壊	激震の房州北条町所見	赤塚忠一	北条町	自然の力に依つて亡びゆくものの前には、科学の力も、人間の力も極めて弱小であつた。
	2	道路亀裂	同 其二	赤塚忠一	北条町にて	地は裂けた、だが地に棲むものは何処までも地の執着を失はない。
	3	倒壊	同 北條警察署	赤塚忠一	北條警察署	凡てのものは亡びた。失はれた。白い姿は何を思ひ、何をしようとするのであらう。
28	1	地変	鷹島沖の島を望む………館山海岸	赤塚忠一	高島沖の島を望む館山海岸	すべてのものは静寂に帰つた。忽ち陸地に続いた鷹島。
	2	街道崩壊	岩井付近の県道	赤塚忠一	岩井付近の県道	逃げたい。！ ただにげたい。
29	1	群集	房州館山栈橋の群衆	赤塚忠一	館山栈橋	陸をのがれて海へ！
	2	倒壊	館山町所見	赤塚忠一	館山町所見	地の一角
30	1	警護	中央線余瀬駅に兵士の眼番	丹羽禮介	中央線余瀬駅	軍隊の力に依つてはじめて群衆の殺到は整理された。
	2	街道崩壊	同 余瀬上の原間徒歩連絡の図	丹羽禮介	中央線余瀬上の原間徒歩連絡の図	追はれ逃げてゆく人間、その中には前途には何の求むるものもなかつた人もあらうに。
31	1	パノラマ図	東京全市の火の海	丹羽禮介	[無題]	書家の幻想二つ 一、欧風化した都市の滅亡。
	2	パノラマ図	帝都震災の刹那	清水吉臣	帝都震災乃刹那	二、和風化した都市の滅亡。
32	1	パノラマ図	横浜震災大火パノラマ地図	清水吉康	横浜震災大火パノラマ地図	焼土と化した横浜市
	2	パノラマ図	清水吉康	清水吉康	東京近県震災略図	厄主とその附近。
33			東京大震災火災パノラマ地図	清水吉康	東京大震災火災パノラマ地図	残る東京と、失はれたる東京。

装丁 (中澤弘光)、解説 (薄田清)。

奥付 発売元：金屋文淵堂、大阪出張所 大阪市外天下茶屋板橋筋616：発行日：大正12年10月21日印刷、25日發行

編集兼発行者：金屋種次郎 (東京市麹町永田町2丁目30番地、印刷者：伊藤正三郎 (京都市新町通竹屋町南入弁才天町301)、印刷所：便利堂 中村弥左衛門 (京都市新町通竹屋町南入弁才天町301)

※印：文中に画像掲載

表2 「大正震災木版畫集」 一覧表 立命館大学歴史都市防災研究センター所蔵

冊数	枝番	分類	画名・題名	画中題名・日付・署名	著者名・ 絵師	彫師	摺師	画中文	出版年・ 作成年	注記・その他	大きさ	縦×横
	0	封筒										
0	1		「大正震災木版畫集」開版 裏告							説明書き及び申込書	1枚 19.7 cm×54.3 cm	
1	1	避難者	臨時ブラック (本所相生町)	大正十二年九月四日洗鱗寫生⑩	桐谷洗鱗	長島鬼一	田村鐵之助	本所相生町二丁目 十七吉村米三、 尋々人吉村ミツ七才	1923.9.4	裏に貼紙有	36.7 cm×27.2 cm	
1	2	避難者	※宮城前天幕村	宮城前天幕村大正十三年一月小虎	川崎小虎	長島鬼一	田村鐵之助		1924.1	裏に貼紙有	27.0 cm×36.0 cm	
1	3	倒壊	炎上 (本所國技館)	国技館炎上 笛畝画 ⑩	西澤笛畝	長島鬼一	田村鐵之助			裏に貼紙有	27.0 cm×36.0 cm	
2	1	避難者	※運送馬車 (京橋通)	長秋	磯田長秋	長島鬼一	田村鐵之助	上野品川間五十 錢		裏に貼紙有	27.0 cm×37.0 cm	
2	2	倒壊	湖南六題 (鎌倉長谷)	大正十二年癸東大震災伝 (カ) 鎌倉 長谷所見 觀潮写	織田觀潮	長島鬼一	田村鐵之助			裏に貼紙有	36.3 cm×27.0 cm	
2	3	倒壊	※夕陽に映ゆる女神像 (神 田仏英女学校跡)	夕陽に映ゆる Jeanne d'Arc 像 大 正十二年九月亨 彩天⑩	田村彩天	長島鬼一	田村鐵之助		1923.9	裏に貼紙有	37.3 cm×27.0 cm	
3	1	倒壊	震後のニコライ堂 (神田駿河臺)	震後のニコライ堂 笛畝 ⑩	西澤笛畝	長島鬼一	田村鐵之助			裏に貼紙有, 裏告 (0-1) 中の題は「澄め る夜 (神田ニコライ 堂)」	36.2 cm×27.0 cm	
3	2	倒壊	待乳山 (浅草今戸)	待乳山 大正十二年九月 小虎	川崎小虎	長島鬼一	田村鐵之助		1923.9	裏に貼紙有	26.0 cm×27.2 cm	
3	3	避難者	※西郷の銅像 (上野公園)	大正十二年九月六日洗鱗寫生⑩	桐谷洗鱗	長島鬼一	田村鐵之助		1923.9.6	裏に貼紙有	37.5 cm×27.0 cm	
4	1	倒壊	橋の袂 (神田橋)	長秋	磯田長秋	長島鬼一	田村鐵之助			裏に貼紙有	37.5 cm×27.0 cm	
4	2	倒壊	湖南六題 (藤澤町)	東海道藤澤町惨状 大正十二年九月 一日夜 觀潮写	織田觀潮	長島鬼一	田村鐵之助		1923.9.10	裏に貼紙有	36.5 cm×27.1 cm	
4	3	倒壊	本郷座の焼跡	本郷座の焼跡 大正十二年九月 彩 天⑩	田村彩天	長島鬼一	田村鐵之助		1923.9	裏に貼紙有, 裏告 (0-1) 中の題は「焼尽 されたる歓楽場 (本郷 座)」	27.0 cm×36.0 cm	
5	1	倒壊	※黄昏るゝ頃 (日本橋)	黄昏の日本橋 笛畝画	西澤笛畝	長島鬼一	田村鐵之助			裏に貼紙有	36.0 cm×27.0 cm	
5	2	避難者	救護所 (深川)	洗鱗寫生⑩	桐谷洗鱗	長島鬼一	田村鐵之助			裏に貼紙有	36.0 cm×27.0 cm	
5	3	倒壊	愛宕山 (芝)	大正十二年九月二十日 愛宕山にて 長秋⑩	磯田長秋	長島鬼一	田村鐵之助		1923.9.20	裏に貼紙有	27.2 cm×36.2 cm	
6	1	倒壊	湖南六題 (片瀬川)	古台 (カ) 片瀬川附近 大正十二年 九月癸東 大震災後所見 觀潮写	織田觀潮	長島鬼一	田村鐵之助		1923.9	裏に貼紙有	27.0 cm×36.7 cm	
6	2	倒壊	雨の天幕病院 (築地聖路加病院)	雨の天幕病院 彩天画⑩ 1923.Oct	田村彩天	長島鬼一	田村鐵之助		1923.10	裏に貼紙有	36.7 cm×27.2 cm	
6	3	倒壊	神田明神焼跡 (神田)	神田明神焼跡小虎写	川崎小虎	長島鬼一	田村鐵之助			裏に貼紙有	27.3 cm×37.0 cm	
7	1	倒壊	吉原大門 (浅草)	大正十二年九月六日洗鱗寫生⑩	桐谷洗鱗	長島鬼一	田村鐵之助	秋信光通 西行燈影	1923.9.6	裏に貼紙有	36.3 cm×27.2 cm	

7	2	倒壊	大震災後の和田倉門 (丸ノ内)	大震災後の和田倉門 小虎寫	川崎小虎	長島鬼一	田村鐵之助			裏に貼紙有	27.7 cm × 37.0 cm
7	3	倒壊	震火災後の三越 (日本橋)	震火災後の三越 笛畝画	西澤笛畝	長島鬼一	田村鐵之助			裏に貼紙有, 裏告 (0-1) 中の題は「榮華 の跡 (三越呉服店)」	36.0 cm × 27.2 cm
8	1	避難者	野外学校 (相州平塚)	野外学校 彩天画 [㊞] 大正十二年九月 月 平塚所見	田村彩天	長島鬼一	田村鐵之助	1923.9		裏に貼紙有	27.0 cm × 36.2 cm
8	2	倒壊	湖南六題 (保土ヶ谷)	東海道保土ヶ谷陵道前山崩 大正十二年九月一日突東大震災后 遭難之 印象 觀潮写	織田觀潮	長島鬼一	田村鐵之助	1923.9.1		裏に貼紙有	36.2 cm × 27.0 cm
8	3	倒壊	路上の残骸 (浅草)	長秋 [㊞]	磯田長秋	長島鬼一	田村鐵之助			裏に貼紙有	36.3 cm × 27.0 cm
9	1	倒壊	大震災後の被服廠跡と安田 邸 (本所)	大震災後の被服廠跡と安田邸 小虎 写	川崎小虎	長島鬼一	田村鐵之助			裏に貼紙有	26.9 cm × 36.2 cm
9	2	倒壊	焼残りたる浅草觀音堂 (浅草区)	焼残りたる浅艸觀音堂 笛畝 [㊞]	西澤笛畝	長島鬼一	田村鐵之助			裏に貼紙有, 裏告 (0-1) 中の題は「靈驗 の御堂 (浅草觀音堂)」	27.0 cm × 36.2 cm
9	3	避難者	避難民の混雑 (上野広小 路)	大正十二年九月 洗鱗 [㊞]	桐谷洗鱗	長島鬼一	田村鐵之助	1923.9		裏に貼紙有	27.0 cm × 36.2 cm
10	1		湖南六題 (横浜駅)	横浜桜木町駅 觀潮写	織田觀潮	長島鬼一	田村鐵之助			裏に貼紙有	27.2 cm × 36.2 cm
10	2	避難者	秋晴れのバラック村 (日比谷公園)	秋晴れのバラック村 大正十二年十月 月 日比谷所見 彩天 [㊞]	田村彩天	長島鬼一	田村鐵之助	1923.10		裏に貼紙有	27.0 cm × 36.2 cm
10	3	避難者	銀座裏 (京橋尾張町)	長秋	磯田長秋	長島鬼一	田村鐵之助			裏に貼紙有	27.2 cm × 36.2 cm
		欠	木場 (深川)		磯田長秋						
		欠	湘南六景 (小田原)		織田觀潮						
		欠	野毛の山から (横浜)		田村彩天						
		欠	親子離散 (千葉八幡宿)		西澤笛畝						
		欠	芝浦 (芝)		川崎小虎						
		欠	施米 (浅草本願寺)		桐谷洗鱗						

※印：文中に画像掲載

注

- (1) 「近代日本画における風俗画」展（京都市博物館，1984年）；震災七十周年「関東大震災と横浜」展（於横浜開港資料館 1993年）牛田鶏村「震災画集」，服部亮英「関東大震災絵巻」などが公開展示；「絵画に見る関東大震災」展（於すみだリバーサイドホールギャラリー，1995年）池田遙邨，鹿子木孟郎など 30 余名の作家の描いた絵画，版画，スケッチなど展示；以上の情報は新井勝紘「少年が見た朝鮮人洲遺跡——『描かれた朝鮮人虐殺』序論——」（『歴史科学と教育』16号，1997年）に拠る。他に，萱原白洞作「関東大震災絵巻」展示（大阪人権博物館，1997年）；池田遙邨 関東大震災スケッチ展——新発見の作品を中心に——（有楽町朝日ギャラリー，1998年）。
- (2) 仲間恵子「萱原白洞『関東大震災絵巻』に描かれた朝鮮人虐殺——震災下の民衆意識を探る——」（『リパティ』17号，1997年）；同氏「描かれた朝鮮人虐殺と作者・萱原白洞——『関東大震災絵巻』からみえてきたこと」（『大阪人権博物館紀要』創刊号，1997年）
- (3) 注2参照
- (4) 「震災絵巻・朝鮮人虐殺シーンを描いた画家・萱原白洞」（香川県高等学校教育研究会同和教育部会『高同研』24号，2001年）
- (5) 前田興「池田遙邨と関東大震災」『池田遙邨 関東大震災スケッチ集——新発見の作品を中心に——』朝日新聞社，於有楽町朝日ギャラリー展示図録，1998年；前田興「鹿子木孟郎から見た関東大震災」『大正イマジュリー』4号，2008年
- (6) 『池田遙邨 資料集』倉敷市立美術館，2004年
- (7) 同上，90～91頁
- (8) 高尾憲一カメラマン「震災特集号」（『婦女界』大正12年10月号，9～16頁）
- (9) 前田興，1998年
- (10) 和田博文編『モダン都市文化 関東大震災』（ゆまに書房，2007年）所収「震災画譜『画家の眼』」（黎明社，1923年12月25日）に登場する漫画作家と殆ど同じ作家連である。
- (11) 倉敷市立美術館編『池田遙邨 資料集』161頁，（2004年）
- (12) 注5前田興論文参照
- (13) 五十殿利治『観衆の成立—美術展・美術雑誌・美術史』東京大学出版会，2008年
- (14) 新井勝紘「『描かれた朝鮮人虐殺』論 その二——関東大震災80年をむかえて——」（『隣人』17号，2003年）

朝鮮人虐殺問題から震災絵画の分析をされてきた新井勝紘氏には「ねじ釘の画家」柳瀬正夢の震災スケッチブック，日本画家豎山南風の震災絵巻を論じた論稿がある。また，小学校の生徒たちに描かせた震災体験画についても，新井氏による前掲論文（注1参照）において，慰霊堂保管資料のなかの本横小学校（本所区横川町所在，東京大空襲で再び焼失，廃校）の高田力蔵という若い絵の教師に指導されて描いた146枚の学童の震災画の詳細な分析が試みられている。そこでは，小学校低学年から高学年になるに従い，2色のコントラストの強い不気味さも漂わせる色使いから徐々に冷静でリアルな描写へ向かうことが指摘され，先に言及した時間の経過による画題対象の内省化と符号するような傾向も導き出されている。さらに，そのなかでも千葉県東葛飾郡中山村若宮地先での朝鮮人虐殺に関連するとして新井氏が注目する10歳の山崎少年の絵画についての詳細な分析が紹介され，この「中山」と記された地点が朝鮮人暴行の流言の全国流布に関与したとされる船橋送信所の近くであったことを論証された。

慰霊堂保管資料のなかには本横小学校に限らず，多くの小学校児童の作文，絵画が残されており，震災後の小学校教育では深刻なトラウマとなる子供の震災体験をどのように癒そうとしたのかという観点から見直す必要のあるテーマと考え，こうした問題も踏まえ，震災絵画についての更なる考察は後日を期すことにする。

付記 作家の生・没年などは『美術家人名辞典』（日外アソシエーツ），『絵本・挿絵大辞典』（大空社）米村み

ゆき編『モダン都市文化 漫画』（ゆまに書房，2008 年），前掲和田博文編『モダン都市文化 関東大震災』などに拠った。

謝辞 本稿を成すにあたり，萱原家の方々，倉敷市立美術館，京都国立近代美術館の学芸員各位には，原画を熟覧させていただくための労をとっていただき，貴重な絵画の画像フィルムをご提供いただいた。また大阪人権博物館，立命館大学歴史都市防災研究センターからは画像の電子データの使用をご快諾いただいた。心から感謝の意を表したい。